

---

# 私の騎士（かれ）は女の子！？

猿道 忠之進

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の騎士かれは女の子！？

### 【EZコード】

EZ8573Z

### 【作者名】

猿道 忠之進

### 【あらすじ】

戦乱の大陸ハームレイ、その中で最も大きく安定しているのが、騎士の国ベルムンティア王国である。

そのベルムンティア王国の近衛騎士、エスティオ・アストールは若手ナンバーワンと呼ばれる実力者だ。

そんな彼が元宫廷魔術師で、指名手配犯の黒魔術師ゴルバルナを追い詰めるのだが……。あと一步のところで逆に返り討ちにあう。意識の途切れた彼が目を覚ますと、彼は絶世の美少女になっていた。彼女の体を取り戻す旅が今、始まるうとしていた。

「メティ女体化ファンタジー」です。読んでいただけすると、とても光栄です。評価や批評を頂けると、なおのこと光栄です。

## プロローグ（前書き）

序盤はタグにある野の子、オネショタ要素は一切ありません。

## プロローグ

町に一歩出れば、路地には露店が並んで、活気があふれている。

商店の前で値段交渉をする主婦や、その周囲を駆け回る子ども、老若男女すべてがここの人々である。そんな人々の中を、一際体格の大きな青年が歩いていた。

背丈は人より頭が一つ分抜きん出て、体格は一言で表せば筋肉質だ。均整のとれた体つきから、その青年が何かしら武道をしているのはすぐわかる。

その彼の顔はとても不機嫌そうなものだった。

「何が、褒美の休暇だ。ただの厄介払いじゃねえか」

などと毒づく青年は、プラチナブロンドの短髪の頭をかきながら毒づいていた。

「アストール。気分転換は必要だよ。最近は休暇もろくなかったし、いいんじゃないの?」

そう言つて彼の横を歩く女性が、話しかけていた。別段女性として背が低いわけでもないが、その青年、エスティオ・アストールの横に並ぶとまるで大人と子供ものように見える。

「気分転換か……。こんなにスッキリしないのに、気分転換も何もあるかよ」

アストールはそう言つと、王城で起きた事件の事を思い出していた。

「ああ！ ちきしょー！ 思い出しただけで、ゴルバの野郎を逃がしたのが腹が立つてくるぜ！」

アストールはそう言つと、むつとした顔で叫んでいた。だからと言つて、彼を見る人はいないに等しい。叫び声も周囲の活気の中に、飲み込まれていた。

「仕方なかろう。アストールよ。奴は宫廷魔術師でありながら、黒魔術にまで手を出していた。そして、何より、奴はこの国で一番の魔術師だ。あんな悪魔どもを召喚されでは、我々とてビリじょうもない」

そう言つてアストールを諭すのは、ジュナル・レストニアアという魔術師である。彼の従者であり、教育係も務めている。

33歳と歳の割には落ち着き払つていて、どことなく爺くさいおやじである。

「ジュナルの言つとおり。王城が損壊するくらいに暴れられたら、どうしようもないって」

「メアリー。あいつは今でも黒魔術の生贊を探してゐるんだぞ？ しかも、生きた人間をだ！ そんな奴を放つて、こうやって遊んでられるかよ」

そう言つて先ほどの女性、ことメアリーに對して言つ。だが、彼女の答えは至つて冷静なものだった。

「見つけようにも、見つけられない。ましてや、相手は鼻のいい犬と一緒に。こっちが近づけば、臭いに気付いて逃げちゃうよ？ だったら、尻尾だすの待つのが、狩りのセオリーでしょ？」

メアリーはそう言って如何にも、元獵師らしいことを囁く。

「だがよお。ん？」

反論しようとしたアストールは、そこで言葉を止めていた。

何かを見つけ、目を細めて一点を見つめる。

すぐに異変に気付いた二人は、アストールの顔を見ながら問いかける。

「どうしたエスティオよ？」

「いや、さっきゴルバを見たような気がして、あの外套を被った野郎」

そう言つてアストールは、人ごみの中を指さしていた。その先には確かに外套を頭からかぶつた怪しい人物が、歩いてくる。

「まさか。こんな近くにいるわけないじゃん」

メアリーはそう言つなり、アストールの背中に抱きつくように飛び乗つっていた。田を細めて彼の言つ外套男を見ると、男は一瞬だけちらりと顔をこちらに向ける。

そこで二人は言葉を合わせていた。

「本当にゴルバルナだ」

「ジユナル！ すぐに駐屯騎士隊を呼んで来い！ メアリー！ お前は早馬に乗つて王城に知らせるんだ！」

アストールの的確な指示に、二人は顔を合わせていた。

「何やつてる！？ 奴が逃げるぞ！」

「だが、エスティオよ。一人で行つては危険すぎるのではないか？」

ジユナルの問いに、彼は不敵な笑みを浮かべて答えていた。

「借りはきつちり返す。俺はあいつを追つ！」

そういうなり、彼は腰に下がっていた剣をぽんぽんと叩いていた。

「やはり、一人で行くのはよさぬか。ここはやはり二人で行つた方が」

「近衛騎士の、主人様からの命令だぞ？」

そう言われると、さすがのジユナルも引き下がるしかない。

因縁のある相手ゆえに、アストールが一人で行きたがるのはよくわかる。だが、相手は元宫廷魔術師であり、現在は大魔術師と言つても過言ではない相手だ。

一人で行くには危険が過ぎる。

「な、心配すんな。無理はするが、無茶はしない」

アストールのその言葉に、二人は不安を隠せなかつた。だが、呼び止めるよりも先に、彼は走り出していた。

大きな背中を見送つた二人は、主人の身を按じながら言われたことを実行するのだった。

「この野郎！ 待ちやがれ！ 腐れど変態魔術師がああ！」

アストールが駆けているのは、町からほどなくしてある森の中だ。

外套男は彼を見るなり、即座に逃げだしていた。それがアストールの足を、余計に速めていた。

けして若くはないゴルバルナが、18の体躯のいい青年に追いつかれるのは時間の問題だった。暫くして、外套の男、ゴルバルナは走るのをやめて、彼の方へと向き直る。

「ぐ、この筋肉馬鹿のオーガめ！」

ハアハアと息を切らせた初老のゴルバルナは、アストールを前に毒づく。

「へへ！ 体力だけは自信があるのでね！ さあ、変態爺！ 覚悟しやがれ」

アストールは鼻をすすると、腰の帯剣を抜いて構える。

例え相手が丸腰であつても、容赦をしない覚悟の表れとも取れる。

「ぐ、こんな男に、私の夢が、計画が邪魔されるとは！」

ゴルバルナはそう言つと、殺氣を込めてアストールを睨み付ける。そして、腰から杖を取り出して構えていた。

「観念しろ！ どうせすぐに騎士隊が来る。てめえは終わりだ」

「それはどうかのお？ まあ、行くぞ。炎の聖靈よ。我が言葉にしたが」

詠唱を始めたゴルバルナに、アストールは一気に間合いを詰めていく。 ゆうに大きな家一つ分くらいの距離を、あつといつ間に詰めていた。

「な、なんと！？」

詠唱が終わるよりも先に、アストールの鋭い太刀筋がゴルバルナを襲う。

ゴルバルナはとっさに杖を横に構えて、彼の太刀筋を防ごうとした。だが……。

剣が杖を真つ二つに斬り、ゴルバルナはおじけずいてその場に尻もちをつく。

「へ、魔術師つてのは、杖がねえと何も出来ねえ人間なんだろ？」

杖を折られたゴルバルナは、不敵に笑みを浮かべるアストールを見上げ、悔しそうに睨み付けていた。

「貴様、それを知つていて、わざとあの距離を」

「ああ。あえて、てめえの杖を切らつたんだ。さあ、次はてめえの番だ」

アストールはそう言つと、剣の切つ先を「ゴルバの首に突きつける。形勢は完全にアストールのものとなり、ゴルバは一瞬で表情を変えていた。

「ひいい。ま、待つてくれ。助けてくれ」

おびえた表情を見せて、右手をアストールに向ける「ゴルバルナ。それを見て、アストールは表情をゆがませる。

「ああん？ てめえはそやつて助けを求める人を、黒魔術の実験で殺していつたんだろうが？ 助けてやるぎりなんてな、ねえんだよー。」

アストールはそう言つと、剣をゴルバルナの喉元に突き立てようとする。その時だった。

突然アストールの胸の前で爆発が起こり、焼けつくような炎が彼を襲つていた。

爆風で吹き飛ばされたアストールは、剣を抜いた位置まで吹き飛ばされる。

「ぐああー。」

地面上に叩き付けられたアストールは、薄目を開けて、ゴルバルナを見る。ゴルバルナは右手をそのままにして、立ち上がり愉悦に満つた笑みを浮かべていた。

「どうじゃ？ 儂の一世一代の大演技は？ 見事じゃつたろう？」

ゴルバルナは煙の上がる右腕を上げたまま、ゆっくりと歩み寄る。アストールが持っていた帶剣はどこかに吹き飛び、魔法をもろに受けた彼は胸を押さえて動けないでいた。

「な、なぜ。杖は破壊したはずだ……」

その言葉を聞いた瞬間に、ゴルバルナはどつと笑いだしていた。

「ははは。忘れたか、儂は黒魔術師よ。禁断魔法でこのくらこのことなど、容易いことよー！」

一気に形成の逆転した立場に、ゴルバルナはどつと笑いだす。

「ああ、愉快愉快。儂の計画を邪魔し、頓挫させてくれた貴様には最高のプレゼントじゃ」

魔法をもろに食らったアストールは意識を失いかけ、朦朧とする意識の中眩いでいた。

「ああ、ちきしょ。最後に最高の女が抱きたかったぜ……」

そういうなり、彼の意識はふつつと途切れていった。

本当ならば、ここで彼の命などなくなつていたに等しい。だが、ゴルバルナは右手を下げ、気を失つている彼の前まで歩み寄る。

「ふむ。ただ、殺すだけではつまらんな。どうせなら、もつと精神的に苦痛を与えてやつてもいいだろ。わしが味わつた以上の苦しみを味わうがいい」

ゴルバルナはそう言つと、またしても歪にゆがんだ笑みを浮かべていた。

ハームレイ大陸、かつては魔法を主流とした大帝国が栄えていた。だが、そんな帝国も皇帝の家柄の断絶によつて、バラバラとなつてしまつ。

今やそのハームレイ大陸はいくつもの国々が乱立する戦乱の世を迎えていた。

そんな中、一際大きく安定した国がある。それがベルムンティア王国。

かの国ではかつて帝国が行つていた非人道的な魔術を禁止し、その魔術を研究する者に罰則を与えていた。

そして、その非人道的な魔術を研究する者を黒魔術師と呼んで、

蔑視することに成功する。世界においてもこの流れが確立し、早、700年。ベルムンティア王国は領土が最大となり、最盛期を迎えていた、

「「うわあはいたか！？」

「いや、いない！」

耳に入つてくる男たちの声を聴き、アストールは目を覚ます。いまだに魔法を受けた胸が痛み、体も自由に動かない。

「どうするんだ？」

「どうもこつもあるか！ あの黒魔術師を追い詰めたというの！」

男たちの会話を聞く限り、ゴルバルナはそつ遠くには逃げていな  
い。

何より、自分はなぜか助かっている。

そのことに安堵しながら、アストールは目を開けていた。

「大丈夫？」

目を開けるとそこにはメアリーがいる。心なしか彼女がいつもよ  
り大きく見える。

「気が付いたわ！」

ぼやける視界にアストールは、周囲を見回していた。

森の道を巡回する銀色の甲冑に身を包んだ騎士とその従者たち。  
騎士は馬に跨つて指示をだし、従者は森の中を捜索する。

メアリーの声に即座に現れたのは、ジュナルだった。彼もまた心配そうに、アストールを見ていた。

「大丈夫かね？」

ジュナルがそう他人行儀に聞いてくる。

心なしか、ジュナルも自分よりも背丈が大きく感じられた。

（これが敗北するってことか……）

アストールはそう思うと、なぜか涙が零れ落ちてくる。  
あそこまで追い詰めておきながら、自分の油断でまたしてもゴルバルナを逃がしてしまった。そう思うと、情けなくて仕方がなく、また、胸の奥に詰まっていた思いが吹き上がってきたのだ。

「だ、大丈夫？」

慌てたようにメアリーがアストールの目頭からこぼれた涙をふき取る。

「何か怖いことでもあつたのであらう。もしかするとゴルバに乱暴されていのかもしれん」

（そう、乱暴されていた。ん？ 待て、確かに乱暴されたが、なんか言い方が違うよな）

「ジュナル！ そう言つことを本人の前で言わないの！」

メアリーがそう言つと、ジュナルは目を背けていた。

「お、おう。すまん。拙僧としたことが、気も使えずにするまぬ

「でも、もしそうだったら、私、絶対許せない。」

メアリーが珍しく自分のために怒っていることに気付いて、アストールは妙にうれしくなる。こにはもう少し、彼女の膝の上で頭を寝かしておいた。

「こじても、あの筋肉馬鹿。ビに行つたのかじり。」

（ん？ 筋肉馬鹿？）

寝つこうとしたアストールは、すぐ口元を覚ます。

「全くもって。あのお調子者が。いくら、綺麗な裸の女性を助けたからとて、自分の着ていたすべての衣類までも被せることもなからう」

ジユナルの言葉を聞いて、アストールは完全に口元を覚ましていた。

（お、おれが裸？ ん？ 女性が裸？ じゃなくて、なんだ？ 何を言つてゐるんだ？）

「でも、裸でゴルバを追いかけるとなると、ひょっと笑えるかも」

メアリーがそう言つと、ふと吹き出す。

「全くもってその通りだ。まあ、それだけ余裕があるとみていい。安心してあのバカを待とうではないか」

ジユナルも自然と笑みを浮かべて、森の方へと顔を向ける。

明らかに一人は勘違いしていた。なんせ、メアリーとジユナルの目の前に横たわっているのは……。

「な、何言つてるんだ？　俺はちゃんとこにいるじゃねえか？」

瞬時にアストールは絶句する。そして、その言葉を聞いたメアリーとジユナルが、怪訝な表情を浮かべていた。

自分の出した声は明らかに女性の声、それもかなりの美声だ。

数瞬動きを止めたアストールは、その場で立ち上がっていた。立ち上がった瞬間に全ての服が、スルリと抜けおちる。自分の体を見た瞬間に、アストールは言葉を失っていた。アストールだけではない。

周囲の者が一斉に動きを止め、アストールを凝視する。

もちろん、ジユナルもメアリーもである。

手を見れば細く、明らかに女性の綺麗な指が並び、その手を痛む胸に持つていくと、豊満な乳房がついている。

「あ。ある」

そして、そのままぎこちない手つきで、股間まで手を回してがつくしと肩を落としていた。

「な、ない……！」

その奇行に暫し全員が動きを止めていたが、メアリーが慌てて下

に落ちていた服を拾つてアストールの体にかけていた。

「ちょ、ちょっと。み、みないの！ 殿方は全員作業に戻りなさい！ もうさと戻れ！」

メアリーの怒るように言つと、全員がすぐに作業に戻つていた。立ち上がつたメアリーと一緒に張るの視点に、アストールは再び絶句する。

「ちょ、ちょっと。これはどういじだ！？ なんで俺は女に！？」

「なに言つてるのー？ そんなことより、アストールはどこの？」

奇行に気分を害したらしく、メアリーの口調はきつい。

「え？ 田の前にいるじゃねえか

「はあ？ なになめたこと言つてんの？ あんたがアストールなわけないでしょ！」

混乱するアストールにメアリーが怒声を浴びせた。奇行に加えて見ず知らずの裸の女性がアストールと言い張るのだ。メアリーも気分が悪くなるのも無理はない。

「いやいや、メアリー聞いてくれ。俺はアストールだ。本当に俺なんだ」

「んなわけないでしょ！ あんたみたいな美女が、アストールなわけない！ 第一にあいつは男よ！」

「落ち着いて聞いてくれ。メアリー！ 何がなんだか俺にもわから  
ないんだ。どうして自分が女になつてるかなんて、俺が知りたいく  
らいなんだ！」

メアリーに對してアストールは至つて真剣に話す。

最初は悪ふざけをしていくと思つたのだが、とても彼女が嘘を言  
つているとは思えなかつた。

メアリーはそれに気付いて、怪訝な表情を見せながらも聞いてい  
た。

「じゃあ、あんたがアストールだつて言つなら、証拠をだしなさい  
よ」

そういわれて、アストールはしばし考へた後彼女に言つていた。

「ヒスティオ・アストール。王族付近衛騎士隊。第一軍団の軍団員。  
好んで使用する武器は大剣だ。レマニアル領の領主で、大抵、領内  
の奉公は爺さんにまかせきりだな。それによく口を酸っぱくして、  
将来のレマニアルの未来はどうなるか心配だつて言われてるぜ」

自信ありげにアストールは腰に手をやつていつ。けして威張れる  
よつことでもないのだが、なぜか彼は自慢げにしていた。

どれもこれも知りうと思えば、知れる範囲の答えである。それに  
対して、メアリーは訝しげに目を向けていた。

「信じられないわ。第一に男が女になれるわけないもの」

「じゃあ、あれはどうだ？ 僕がゴルバの秘密研究所を王城地下室で見つけたこと」

アストールの口から出た言葉に、メアリーは押し黙る。

王城の地下にゴルバの研究所があつたことは、一部の関係者以外には口外されていない。ましてや、誰かが喋つていれば、それこそ処刑に値する。

だが、それでもメアリーは納得しかねていた。

田の前にいる金髪美女が、アストールの名を語ること自体怪しい出来事だ。もしかすると、魔術にかけられたゴルバの手先ではないかという懸念さえある。

「それに男が女になれるわけない！」

「……じゃあ、どうすれば信じてくれる？」

アストールがそう言つと、メアリーは暫し考え込む。そして、時間を開けて答えていた。

「私との出会いを話して」

それを聞いたアストールは、すぐにしゃべりだす。

「日が昇りきらない朝だったか。お前が狩りをしてて、妖魔8体に襲われる所を、俺が助けた。確かその時、お前は弓の矢が切れてい、無謀にも素手で戦かおうとしてたな」

そう言われた時、メアリーはにわかに信じがたいが、彼女がアストールであることを確信した。

なぜなら、その運命的な出会いは、誰にも口外していない。また、アストールにもこのことは言わないよう口止めしていたのだ。なあかつ、初めて会ったのは森の中で、けして街中で見られるようなことはない。

要は一人だけしか知りえない情報である。

「う、ううう。うわ」

メアリーは半分確信していただけに、余計に目の前の現実を否定したくなる。

「こんなこと、こんなことあり得るわけないじゃない！ 絶対にあいつがほかの女に喋ったんだ！ 女癖悪いしさー。」

「その言ことみづみじドイな！ 確かに女癖悪いのは認めるが、俺は秘密は守る男だ。お前との秘密は何一つ他の奴にしゃべってねえ！」女性の声だが、いつも聞いている口調で言われて、余計にメアリーは胸が張り裂けそうになる。

「う、ううう。こんな、こんな」

完全に否定しようがない事実に、メアリーは涙を流していた。

「ちょっと、待てよ。泣きたいのは俺の方なんだぜ？ なんで、お

前が泣くんだよ。」

「だ、だつて、だつて」

すぐにでも抱きしめてやりたい所だが、生憎、ほぼ全裸の状態だ。幸いメアリーが差し出した服で、体は隠れているが、禁欲主義の宗教騎士隊には生足に生腕はいささか攻撃的すぎる。ジュナルも目のやり場に困っている様子で、泣き出したメアリーに声をかけることができないでいる。

「だあ。もつ！ くそおー。あの『ルバメ！ とりあえずあいつのせいだ！』

やうやけくそ氣味に言うアストールは、泣き出したメアリーを宥めつつジュナルに目を向ける。

「ジュナル！ すぐに俺の着替えと馬を用意してくれ

一連のやり取りを見ていたジュナルは、彼女がアストールであることに気付いていた。

「はは。とはいえ、まさかアストール殿が女になるとは……」

そう言つてジュナルはその場を立ち去つていた。

アストールの身がよつやく落ち着いたのは、その日の夜の事だつた。

宿の一室には灯りがともり、温かい光を放つてゐる。だが、その火を囲む三人の表情は暗い。

丸テーブルを囲む三人は、茶色い髪の毛に白髪交じりのジュナルに、茶髪のショートヘアのメアリー、そして、背中まで伸びた美しい金髪の“女性”アストールの三人である。

酒はなく、あるのは質素なコップに入つた水だけだ。

「にわかには信じがたいが、これまでの話を聞く限り、この方がアストール殿であるのは間違いない」

ジュナルは渋い顔をして、アストールを見つめていた。  
この宿に戻つてから、メアリーとジュナルは女体化したアストールを、改めて尋問していた。

事細かに最近あつたことから、本人しか知りえないことを次々質問する。

当然、アストールは全て答えていた。

「……やっぱりあんたは本当にアストールなのね」

メアリーはとても残念そうにうつむく。

「ああ。そうだ」

アストールは少し服がきついのか、胸元ばかりを気にかける。

「にしても、少し胸のあたりがきついな」

その空氣の読まない発言に、メアリーはさきつといた視線でアストールを見る。

「なによ。それは私の胸が小さいって、遠まわしに言いたいの？」

「い、いや、そうじゃなくて、純粹にきついんだってば」

そう言つてアストールは、自分のはち切れそうな服の胸元を指さしていた。

女性ものの服がなく、急遽メアリーの服の着替えをきていののだ。もちろん、アストール本人の服など、とてもではないがぶかぶかで着れたものではない。

「なによー。やつぱり、冷やかしじゃない！」

「う、うるせえなー。俺だつて望んでこんな体になつたんじゃねえよー。」

「その言葉、余計に腹立つわー。」

メアリーがそう怒声を浴びせるが、ジュナルはため息をついてなにもしない。とつよつよは、アストールの胸元が気になつてゐるせいか、どうにも田のやり場に困つっていた。

「二人とも嘘幃はよせ。それよりもこの状況をどうカルマン殿に説明すればいいのか。それを考えようではないか

だ。  
休暇で訪れたこの町は、レマニアル領に帰郷する途中で寄つた町

おやかこ様な事になるなど、誰が想像してこよつ。

「……爺さんには本物のこじとを話すしかないだらう。それよりも俺が気になつてるのは、騎士としての仕事の方だ」

アストールはそういうと、窮屈そうに胸の前で腕を組む。ジユナルもメアリーも名案が思い浮かばないのか。全く言葉がでてこない。

「こじの状況だもの。急にこじを考えろつていわれても無茶よ」

メアリーはわざと大きく溜息を吐いていた。

「ふむ。まあ、わざとあらうが、一応の指針はあつたほうがよからう」

ジユナルはそういうと腕を組んで考え込む。

「とりあえず、王族付近衛騎士団の騎士に女は禁制。といつか、騎士そのものが女性は禁制だつたわよねー」

メアリーはそういうと、アストールを見つめた。

騎士団の従者くらうならば、女性がいてもおかしくはない。だが、当の騎士の身分となると、話は違つてくる。

基本的に騎士の位に付けるのは男のみであり、女性が爵位を貰うことはない。

もしも、女性であることを公表して、形式的に騎士として居続けたとしても、いずれは爵位剥奪と言つ危険さえある。

「何かいい方法はないかな……」

メアリーはそう言つて、考え込んでいた。

「こいつそのこと、自分を偽つてみてはどうか?」

ジュナルがそう提案すると、アストールは苦い顔をする。どうせろくでもない提案であることに違いない事を確信しつつ、アストールは聞いていた。

「どうこいつことだ?」

「そうだな……。お前は実は生き別れた実の妹であり、自分の体を取り戻すまでは、兄、すなわちお前自身の騎士代行を務めるということにしておけばいいのではないか」

ジュナルの提案はある程度、説得力のあるものだった。

彼ら騎士の世界において、主人が行方不明になつたり、長期で国外に出張した際は、誰かしら従者が騎士代行を務めて業務を行つことがある。

その任命権はもちろん、その主人たる騎士にある。これは別段珍しいことではなく、従者に女性がいれば、代行を女性に頼むことさえあつた。とはいえ、それでも女性の騎士代行は、異例には違ひなかつた。

「かなり田立つんじゃない? それ

メアリーはそう言つてジュナルに疑問を問いかける。

「確かに目立つであろうな。しかし、拙僧やそなが騎士代行になつて、アストール殿に指図することなど、できようかな?」

ジュナルは腕を組んで細田で、メアリーを見ていた。

「うう。確かにちょっと抵抗がある」

「ちょっとってなんだよ。主人だぞ？」

「なによ。別に全く忠誠心がないわけじゃないもん！」

メアリーが子どもらっぽく言い返すと、ジュナルは苦笑していた、「一人とも落ちつきなさい。エスティオよ。今日から女を演じるのも、悪くない提案であると思うが、どうであろうつか？」

ジュナルが微笑を浮かべて、アストールを見つめる。アストールは頬をピクつかせ引きつった笑みで、ジュナルと目を合わせていた。

「じょ、『冗談じやねえええ！　俺は男だぞ！？　急に女になれなんて、無茶があるだろうが！』

そう言つてアストールは椅子から立ち上がり、自分の胸を押さえていた。

彼の手に伝わる柔らかな乳房の感触、それが自分が女であるという現実を突きつける。

アストールは勢いよく叫んだことを後悔していた。表情は暗いものとなり、ゆっくりと椅子に座る。

「す、すまねえ。確かに今は女だ……」

アストールは心底落ち込み、ため息をついていた。

「わかればよい。とはいって、こきなり女を演じよと言つても無理であるわ」「

ジュナルは自分で提案したことを、いきなり否定しだした。

「というわけで、一か月ほど修道会に行つてはどうか?」

アストールは再び顔色を変えて、ジュナルに呟んでいた。

「ば、馬鹿言え! なんでそんなとこに行かなくちゃなんねえんだ!  
女しかない上に陰湿だし、飯はまずいし、生活は真面目くさつて規制されまくつてるような場所、絶対に行かねえぞ!」

貴族の女性はある一定の年齢になると、貴族専用の修道会に入れられて、改めて貴族の嗜みと/orのを再教育される。

一夜を共にした女性から話を聞いていたアストールは、その厳しさと女の世界の怖さというのをある程度は知っていた。

「なんで、あんたがそんなこと知つてるの?」

メアリーが鋭い突つ込みを入れて、アストールは言葉を詰まらせる。

「あ、そ、それはだな。えーとだな。まあ、みんな知つてることじやないか?」

「うかがな? 普通の殿方は修道会つてきいても、そこまで知らないんじゃない?」

「……ど、どうだつていいだらうが！ そんなことより、俺は絶対に行かないからな！」

焦つて話をはぐらかすアストールは、ジュナルを睨み付けていた。このよつた提案をされるとは、思つても見なかつたのだ。

「では、どうするか？ ハスティオ。お前はいきなり女を演じるこどがでれるのか？」

アストールはそつ言われて、言葉を詰まらせていた。だが、すぐに戸に言い返していた。

「お、女とたくさん寝てきたし、他の騎士と違つて、普段から女と付き合いがあるんだ！ そのくらい楽勝に決まつてんだろ！」

彼の発言を聞いたジュナルは苦笑して、彼に向つていた。

「では、まずその蝶り方から変えねばなるまい」

「うう。い、これはほんとうになんねえよ

「それに歩き方だ。傍から見ても男と分かつてしまつよつた歩き方」

そう指摘されたアストールは押し黙るしかなかつた。

いきなり女性を演じろと言われても、そうそうできぬものではない。それは彼自身がよくわかつていた。

「……だからって、そんなどこに俺を入れて、しかも、女そのものになつてのは、酷すぎるぜ」

今にも泣きだしそうな顔で、アストールはつづみいていた。

「じゃあ、女になりきれるつていうの？」

メアリーの言葉に対し、アストールは暫し黙っていた。だが、すぐに顔を上げて、答えていた。

「やるしか、ねえだろ。一ヶ月も修道会で遊んでたんじゃ、ゴルバルナの野郎に逃げられちまう。それにあいつにこんな体にされたんだ！ 戻るためにも早急に奴を見つける方が先だ！」

最もらしい」と、否、最もな意見を盾に、アストールは修道会入りを拒否する。

ジュナルもそれには納得したらしく、大きく頷いて見せていた。

「そうであったな。確かに優先すべき事を間違つておつた

「そうよね。こんな女のアストールなんて、何か馴染めないしね

「だったら、決まりだろ！ 僕も努力して極力女を演じる。だから、協力してくれ！」

アストールの真剣な表情に、メアリーは優しい笑みを浮かべる。

「当たり前でしょ！ あんたにはさつさと男に戻つて、じゃんじやん騎士として仕事してもらわないといけないし！」

ジュナルは腕を組んだまま、アストールを見つめていう。

「レマニアル領をいづれは治める身、それが女性であつては他の諸侯にも示しがつきませぬからな」

そう言われてアストールは苦笑していた。いづれは自分も祖父、父と代々アストール家で守つていた領地を引き継ぐのだ。

そうなれば、今の体のままではどうすることもできない。

結婚して養子婿をとるという選択肢もあるが、生憎、アストールは女として生きていいくつもりはない。

「よし、じゃあ、せつせと爺さんに話を付けに行こう。」

「そうであるな。さて、その前にエスティオ。そなたの名前も女として改名しておかなければなるまい」

ジュナルはそう言つて腕を組んだまま、アストールを見つめる。どうしても自分を女に仕立て上げたいらしく、アストールは心底機嫌を損ねていた。

「おいおい。勘弁してくれ」

「仕方あるまい。まあ、容姿からして一七くらいで通じる。一つ下の妹といつことで、そうであるな……。エスティオ、エスティオ……。ああ。エスティナはどうか？」

一人で勝手に話を進めていくジュナルに、アストールは諦めていた。

この後、ジュナルとメアリーによつて、アストールの妹設定は次々と決められていくのであつた。



レマニアル領についたアストールたちは、早速事情を祖父のカルマン・アストールに話していた。

領内の中間にあるアストール家の館。その一室でアストールの姿を見たカルマンは、その場で泣き崩れて嘆いていた。だが、暫くしてから、アストールら三人の提案を受け入れていた。と言うよりは、受け入れざるをえなかつた。

「俺が俺の妹を演じるから、爺さん。手続きとか色々頼む。この通りだ」

変わり果てた自分の孫の姿とはいえ、その動作からは確かに元の孫の面影が見える。白髪の祖父カルマンは、大きくため息をついて答えていた。

「仕方なかろうに。そのかわり誓え。絶対にゴルバルナを捕まえ、元の体に戻ると」

「神に懸けて誓う。爺さんにまた、元の元気な俺を見せてやる」

「うむ。それでは、書面の作成をしろ。王族付騎士団には私から話を付けておく」

カルマンはそういうなり、部屋から出て行こうとする。だが、入り口の前で立ち止まり、アストールの方へと振り向く。

「お前は元の体に戻るまで、今日よりエスティオの妹、エスティナだ。それは肝に銘じておくのだ。わかつたな」

「わかつてゐるつて、爺さん」

その軽い口調に、カルマンはアストールを睨み付ける。

「わかつておらぬ。それではまるで男ではないか！」

そう言われて、アストールは渋々口調を改めていた。

「わかりました。おじい様。これでいいか？」

何かを言おうとしたがカルマンは、喉まで出かかっていた言葉を飲み込んで、溜息をついて答えていた。

「まあ、いいとじよ」

そう言つてアストールの祖父、カルマンは足取り確かに部屋から出ていくのであった。

それと入れ替わるよつこ、ジュナルとメアリーが部屋に入つてくる。

「どうであったか？」

ジュナルが心配そうに聞くと、アストールは得意げに胸を張つて答える。

「ああ。爺様は俺が騎士代行を務めることを、騎士団に話しつけてくれるとこ」

「そうであったか。それはよかつた」

ジュナルは胸をなでおろして、一時的に状況が安定したことに安心していた。

「まさか、アストールが女だなんて、誰も思いもしないだろうし、騎士団に行つても大丈夫かもね」

メアリーはからかうようにアストールに言う。

「まあ、美貌を持った女であるし、強さも変わつてないはずだ。そこは心配ないだろ?」

アストールはそう言つが、ジュナルは何か不安そうな表情をしていた。

「その事で話がある」

深刻そうな表情を浮かべたジュナルに、アストールは怪訝な顔をして彼を見る。

「何だ? 話つてのは?」

「それなのだがな。ここに来てから書斎で黒魔術関係の書物を調べていたのだが、ある程度のことが分つた」

相も変わらず深刻そうな表情のまま、ジュナルはアストールに続ける。

「なんだ?」

「力は男のときより大分落ちている。その体はあくまで女なのだ」

「え？」

ショックキングな事実に、アストールは言葉を失う。

「うそだろ？」

「本當だ。その証拠にそなたの部屋にある大剣を持ってきてやつた」  
ジュナルはそう言つて肉厚な両手剣を、アストールの前に差し出していた。

「いやいや。冗談はよしてくれよ。これで毎日練習してきたのによ

そう言いながらアストールは、大剣を受け取る。

いつもよりもずつしりとした感覚が手に伝わり、アストールは心の中で焦燥していた。

明らかに手に持つた感覚だと、いつもの数倍は重く感じられる。  
いつもならば軽々と持ち上げて、この剣を両手で構えて甲冑<sup>1</sup>と相手を叩き割れるのだが……。

今はどうだらうか。

柄を持つて構えようとしても、まず持ち上げるのがやつとの状態だ。

「う、うそだろ……」

どうにか剣を両手に構えるが、今のアストールにはそれが限界だつた。

大きな床を割るような音と共に、アストールは大剣を落としている

た。

それと同時に床に腕と膝を着いて、じつとして動かなくなる。

「む、無理だ。こんなに力が落ちてるなんて、想像もしてなかつた」

絶望するアストールに、ジュナルは困ったように彼女を見る。

「当然の結果と言つことか……」

「クソ……。これじゃあ、どうやつて戦うつて言つんだ」

アストールはそう言つと、拳を握り締めていた。今の今まで騎士になるよりずっと以前から、大剣を扱うために並大抵以上の努力をしてきた。

毎朝、貴族としての勉強の合間には筋肉を付けるために日々トレーニングし、常に自分より大きな真剣で素振りをしてきた。

体が大きくなれば、自分よりも一回り大きな剣を用意し、毎日それで素振りをする。

そうして幼い時から剣を変えては、自分で訓練していた。それから、騎士の従者となつてから、最高の訓練を受けて、今の大剣を使えるようになったのが丁度一年前だ。

物心ついた時から怠つたことのなかつた努力が、今、水泡とかしていった。

自分の力のなさに、アストールは絶望し、努力の儂さを憂い悲しむ。

その落ち込みようを見たメアリーは声をかけ様がなく、ただ、目をそむけるだけだった。

「だが、その剣術が全く使えなくなつたと言つわけではあるまい」

そう言つてジュナルが、剣を差し出してくる。

剣の柄には蔓と柏の装飾が施され、どことなく高貴さを感じさせる。刃そのものも細身であり、男であつたころに持てば、棒の枝切れと同じ感覚で振ることもできただろう。

「俺の趣味じゃあねえな……」

「文句を言つでない」

アストールはそう言いつつも、ジュナルから細剣を受け取つていた。予想外に手にしつゝ来る上に、重さも軽すぎず、だからといって重過ぎない。

今の体には最もファイットする剣であることは間違ひなかつた。

「悔しいけど、この剣が一番いいかもしれねえ」

細剣を鞘から抜くと、銀色の刀身を見る。そして、構えてから一、三度素振りすると、そのまま鞘に閉まつていた。

「扱いやすい……。くそ……。こんな細身の剣なのに」

今の動作を見れば、剣舞を舞つているかのとく鮮やかであつた。本人がそれを一番分つている分、余計に悔しさがにじみ出る。

「つまあ、そういうわけだ。これからはその細剣に暫く厄介になるだろつ」

何も言ひ返せずに、アストールはその場で肩を落とすのだった。

アストール達は領内で数日間の休暇を取つたあと、すぐに王都ヴァイレルに戻つていた。

休暇の間も書類の用意に加え、女性モノのレギンスにブーツを購入し、オーダーメイドのプレートアーマーにヘルメットを用意せねばならず、ろくに休めもしなかつた。

とりあえずは領内一の鍛冶屋にプレートアーマーなどの甲冑類防具一式の製作を依頼し、そのまま王都に向かつていた。

出来上がればすぐにでも王都に届ける手はずは整えている。

そして、王都についたアストール達は、早速第一近衛騎士軍団の軍団長、エストル・キャビオーネの元へと向かつていた。

エストルはブロンドの髪の毛であるが、アストールとは対照的に長く髪の毛を伸ばし、その美形の顔は美青年と呼ぶに相応しい。典型的な騎士像というに足りる外見である。

だが、内面はアストールと同等か、それ以上の遊び人である。体の線が細いエストルは、騎士団長の席に座つたままアストールを見つめる。

「で、君があのエスティオの妹君の」

「エスティナ・アストールです」

アストールはそう言って、以前から知つてゐる知人に自己紹介していた。

先輩であり、上司であり、そして、何より、女遊びでアストールに新たな境地を与えたのが他ならぬエストルだ。それだけに、アストールは警戒しなければならなかつた。

「それにしても、お美しい……」

早速のお世辞攻撃に、アストールは内心気分を害していた。

顔はかなりの美形、そして、何より脱げば引き締まったスタイルのいい適度な体、そのラインを強調するかのような服の着こなしは、普段から女性を意識しているからだろう。

「お褒めにつかつて、感謝します。それよりも、私の騎士代行の件につきまして、お話が」

軽く流してエストールに言うと、彼は少しだけ表情を歪めて答えていた。

「ああ、その件であつたな。貴公も生き別れて生活していたとはいえ、貴族の血を引くもの。その資格は十分にある」

アストールはエストールを見据えて、少しだけ表情を柔らかくして言つ。

「ありがとうございます。では、今日からでも騎士代行の務めを」

「ならんな。まだ話は途中だ」

エストールは椅子に肘をついて、足を組んでみせる。その大きな態度に、アストールは内心憤慨していた。

「せつかちなところは兄上によく似ている。貴公に騎士になる資格はある。だが、例え騎士となつても、頭だけではなく武術に関しても、確かなものがなければならない」

女性であるがゆえに、余計にその辺りを気にするのだろう。エストールは真顔のままアストールに言つていた。

「貴公は確かに貴族の人間。しかし、女性である上に、今の今まで  
は街で暮らしていたと聞く。そんな貴公に武術ができるのか？」

疑わしい視線を向けられ、アストールは思わずムツとなる。  
いつもの口調で叫びそうになるのを我慢しつつ、アストールは言  
い返していた。

「もちろん、できますとも。こつ見えて、兄上とあつた時は稽古を  
付けてもらつてましたから。少なくとも、そこの男よりは強いは  
ずです」

アストールはそう言ひと腰の細剣に手を置いていた。エストルは  
それを聞いて、しかりと笑顔を浮かべていた。

「ほほう。そうか。だが、その実力は未知数だ。どうだ？ 私と勝  
負して勝てば、騎士代行を務めさせるのは？」

「え？」

そう言われて、思わずアストールはその甘い言葉に乗りそうにな  
る。

今まで、一対一の戦いでは、どの騎士にも負けた事はない。  
それゆえにその言葉はとても甘い蜜のように感じられた。  
だが、アストールは自分が女の体である事を思い出し、すぐにそ  
の提案にのるのをやめるか迷いだす。

「そ、その、それは少し、酷なものがあるんではありますか？」

そう言つて助け舟を出したのは、メアリーだった。彼女の言葉に

エストルはムツと眉を吊り上げて、メアリーを見つめる。

「酷なことなどあるものか。どのような敵に対しても、対応せねばならない。それが騎士の務めであろう。ましてや、ここに騎士に勝てないようでは、騎士代行など務まるものか」

などともつともらしに事を言つエストルだが、本当のところは得体の知れない女に騎士代行を務めさせたくないのが本音だ。無理難題をふつかけて、早々に退場してもらいたいと言うのだろう。だが、ここでアストールも引き下がるわけにも行かない。

自分の体を取り戻すために、絶対に騎士代行となり、ゴルバの方を追わなければならないのだ。

「確かに、エストル卿の言つ通りで」  
「あります

そう言つたのは意外にも、アストールの信頼する従者、ジユナルだつた。

「流石は聰明な魔術師殿、分つておられる

エストルは笑みを浮かべて、ジユナルを見つめる。それにジユナルも柔軟な笑みで返していた。

「とはいへ、軍団長自らがお相手することもなこと思つのですがな

「何？」

瞬時にしてエストルの表情が険しいものとなり、周囲に険悪な空気が流れる。

「「Jの様な小娘相手に、懲々軍団長が手を煩わすこともありますまい。それにいくら本場の騎士に稽古を付けてもらつてはいたとはいえ、女性であります。ここは騎士見習いか、新人騎士程度に勝てるほどの実力があれば、十分に武の才能があると証明もできると拙僧は考えます。どうでしようかな?」

ジュナルの提案は話のはぐらかし様がないほどに、的を射ていた。騎士代行の実力を推し量るだけに、軍団長自らがでしゃばるのは、いささか大げさが過ぎるのだ。もし、出たとしても、それこそ軍団長として恥というものである。

それが分らないエストルではない。

ジュナルの言葉を聞いたエストルは、渋々にこういっていた。

「それもそうであるな。ジュナル殿の言ひとなり、私が行くのもでしゃばり過ぎというものだ」

アストールはエストルが自分の相手をしない事を、心から安堵していた。

武術に自信があるとはい、それは男の体であつた時の話だ。今はまだ自分の実力さえわからないのである。

「では、その方向でよろしいですか?」

ジュナルの問いかけに対し、エストルは大きく頷いて見せていた。

「そうだな。こちらで相手は手配しておぐ。準備ができ次第、また追つて連絡しよう」

エストルの納得いかない表情を見て、アストールは内心思つ。

(ざまあ、見やがれ、優男め！)

この後待ち受ける試練のことなど、今のアストールには知るよしもなかつた。

エストールとの面会から数日が経つた。そんなある日、エストールの元に騎士団の使いがやってきていた。

王城の一室をあてがわれていたエストールに、敬意を払いつつエストールの従者は慇懃に礼をして見せていた。

「それで、いつ私を試す試合をする？」

エストールは慣れない口調で、従者に聞いていた。

「はは、三日後に新人騎士のウェイン・ハミルトンと真剣試合をしてもらいます。」

その言葉を聞いたエストールは、しばし言葉に詰まっていた。ウェイン・ハミルトン。エストールと同い年の騎士で、質実剛健という言葉がぴったりの騎士である。体格はがつしりとしているが、適度な筋肉量でエストールほどの筋肉はない。それゆえに素早く動き、なおかつ力技の使える手ごわい相手である。

エストールは何度か稽古で手を合わせたが、ちょこまかと動き回られ、苦戦したのを覚えていた。それでも隙が全くないわけではなく、一瞬の隙をついてウェインを打ち負かした。

今のところは負けることはないが、こちらが努力を怠れば、すぐにも追い越される相手であることに間違いはなかった。

それはあくまで男であった時の話であるため、エストールからすれば勝機のある相手とは思えない。

「ウエインをあてつけるか……。エストルめ」

そう呟いたアストールに、従者は怪訝な表情を浮かべていた。

「ウエイン殿をお知りで？」

問い合わせられたアストールは、すぐに笑つてこまかしていた。

「ああ、いや、兄上から聞いたことのある名前で。話には聞いているのです」

自分の言葉使いを気持ち悪いと思いつつ、アストールはすりすりと答えていた。

「さうですか。それでは油断なきよひ心して挑んで下さい」

そう言つなり従者は部屋から出ていく。

後ろにいたジュナルは、アストールを見てから苦笑していた。

「どうやら、私の提案は逆にあなたの首を絞めてしまったようだな

「え？ いや、何にしろ一緒にだ。どうせ相手は男、今の俺では結局不利なことに変わりねえ」

アストールはそう言つて立ち上がり、部屋にかけてある鏡の前まで行く。

女性物のレギンスにブーツが、その綺麗なヒップラインを強調している。それに加えて上半身の豊満な胸と腰の括れが、憎らしいほどのHローチズムを感じさせる。

それだけではなく、凛々しい目つきにほつそりとした顎のライン、透き通るよう綺麗なプラチナブロンドのロングヘアの美女が、鏡越しに立っている。

「だあああ！ 畜生！ 見れば見るほどにいい女じゃねえか！ くそおお！ なんで俺はこんないい女になつちまつてるんだああ！ できるなら、今すぐこの女を抱きたいぜ！」

半分やけくその本音をこぼしながら、アストールは自分の頭を搔き鳴らす。

メアリーは呆れながら、首を左右に振つていた。

「女遊びを自重しろといつ神のお告げかもしれぬな」

ジユナルがその様子を苦笑してみると、アストールは表情を歪める。

「そんなお告げなんてクソくらえだ！ 畜生、この世で一番いい女と思つたのが、なんで自分なんだよ！」

けしてナルシストな発言ではない。アストール自身が男であれば、こんな女性を目の前に通り過ぎたりはしないだろ？ だからこそ、この発言なのである。

「まったくいい薬よ。せつかくのいい女なんだし、いつそのこと喜んだら？」

皮肉以外の何物でもないメアリーの発言に、アストールは大きくため息をついていた、

「そうかもな。いや、そうじゃない！ 全部『ルバが悪い！』

アストールは一人納得してから、自分の腰にある細剣に手をかけていた。

「絶対にあいつを捕まえて、元の体に戻つてやる！ その後で酒池肉林の宴だ！」

などと不純なことを口に呴く始末、メアリーとジュナルは顔を見合させて首を振つて呆れるしかなかつた。

「うーイライラする。なんでこんなにイライラすんだ」

その日のアストールは妙に落ち着きがなく、机の上に肘をついて指をトントンと叩いていた。メアリーは何気なしに、彼に言ひ。

「やつぱり、急に体変わつたからじゃない？」

「そうか？ まあ、それなりいいんだが、なんとなく腹が立つとうか」

戦いの日が前日にせまつっていたその日、アストールは妙に落ち着きをなくしていた。

女性である体に慣れないと、そう言わるとアストールも納得がいく。だが、それでもこのイライラは何かが違う気がするのだ。アストールは居ても立つてもおらず、椅子から立ち上がりつい

た。、

「あー畜生！ 気が晴れねえ！ 明日が試合だつてのに！ なんでこんなにイライラすんだ！ ちくしょおお！ メアリーちょっと、肩慣らしでもしてくるわ！」

「なら、私もついていく」

気軽にそう言つメアリーは、アストールと共に王城の武術場へと向かっていた。

武術場につくと、騎士や貴族、そしてその従者と多くの男性が稽古をしている。

「さて、やるとあるか！」

アストールは細剣を腰から抜く。そして、すぐに素振りを始めていた。

武術場に女性が居るだけでも異質であるのに、それが美人であるとなると目を惹かないわけがない。

素振りをするたびに、揺れるアストールの胸に周囲の男性たちは様々な表情を見せる。

アストールを注視するものや、厭らしい目をする者、また、目のやり場に困るものなど、人それぞれ、個人の性格が如実に表れる。

とはいって、男ゆえに胸に目が行くのはしかたがない。

それでもアストールは周囲の視線を気にする素振りを見せない。いくらか素振りをするものの、アストールは首をかしげる。

「どうにも型が定まらないな……」

そう言つたアストールは細剣を上段から振るうと、振り下ろした細剣を下しきつた位置から再び振り上げる。かと思えば、今度は柄を両手に持ち、横に薙いでいた。

そして、すぐに反対方向に細剣を薙ぐ。

それはあくまでも、両手剣を扱う時の型が混じつた異様な型とも言つものだらう。

細剣であるならば、片手で剣の切つ先を前に構えて、突くことが基本となるからだ。

周囲の騎士達からすれば、女如きが武術の基礎を知らずに剣を振つていると、噴飯ものであつたりするのだが……。

アストールのその動きのキレの良さには目を見張るものがあつた。それが余計にアストールに注目を集める。

「う、美しいな」

「ああ、全くもつて。剣術こそ半端だが、動きはなぜか素人を感じさせんな」

そう呴いた騎士二人が、アストールの近くで腕を組んで彼女の剣術を見ていた。

アストールは当初、それほど気にはせずに練習に集中する。右に左にと剣を振り、そして、相手がいるかのじとく身を動かしていく。長く伸びた髪が靡き、美しい体と相まって、それはさながら音楽に合わせて綺麗に踊つてゐるよつにさえ見える。

周囲の目が集まるのも、時間の問題だつた。

気が付けば、周囲には人垣ができていて、アストールはそれに気が付いて剣を腰の鞘にしまつっていた。

「ちょ、ちょっと、何なんだよ！ あんたたちは？」

気分が乗ってきたところで、急に集まりだした人々。

今までこの武術場で何度も練習をしてきたが、こんなに人ばかりができたのは初めての経験だつた。

いつもならば、憎らしい言わんばかりに年上の騎士が睨み付けてきたり、新人からは嫉みの視線を浴びてと、敵だらけだつた。

それがどうだろう。美少女の体になつた途端、周囲は騎士やその従者、貴族に取り囲まれていた。

今まで経験したことのない異様な雰囲気と男の猛る性を前に、アストールは後ろに一步下がる。

そんなアストールにお構いなしに、一人の貴族が彼女の前に歩み出でいた。

「私の名前はマルクス・ゲオル公爵。あなたはお美しいうえに、剣術まで心得ている。よければ、私にあなたの名前をお教えください」

「あ、この野郎！ 抜け駆けさせるか！」

ゲオルと名乗った貴族の前に、また違う男がアストールの前に現れる。

だが、彼は名乗ることなく、次の男に殴られて床に突つ伏す。

「脅てるだろ？ さあ、お嬢さん。こんな所は危ないですから、私と共にでましょ」

男の言葉は最後まで続かず、また、別の男が殴り倒していた、

「おい！ お前といふ方が危ないだろ！」

「どうちが危ないことか…」

「なんだと！」

男たちは勝手に争いごとを始め、武術場は乱闘の場となっていた。呆れかえるアストールに、メアリーは何故か不服そうな表情を浮かべる。

本来男であつたアストールが、女である自分よりも男を引き付けていることに、多少納得がいかないのだ。

アストールは大きく息を吐いた後、メアリーに言つ。

「面倒なことになつたな……。場所を移そつ」

乱闘に加わりたい衝動を抑えたアストールは、メアリーを連れて王城の中庭へと向かつていた。

一人の背中では尚も、乱闘騒ぎが続いていた。

「だあ、ちつくしょつ！ 全く、男にもてたつてうれしくないんだよー、くそ」

一人して王城の中庭に出て、アストールは細剣を抜いて素振りを始める。いつもよりも荒々しく剣をふるう姿は、正に何かに憑りつかれた様な我武者羅也。

少し上手くいかないだけで、叫び声を上げる。尋常ではない苛立ちようだ。

先ほど武術場でを見せた華麗な剣術も、今は見る影もない。

「だあー、もうー、ちつとも型が定まらねえー、やめたやめた！」

そう言つなり細剣を鞘にしまつ。

まだ、素振りを初めて数分も経つてないにも関わらず、すぐに剣舞をやめていた。

「！」のクソ虫！ 鬱陶しい！

アストールは近くを飛ぶ綺麗な蝶を見て、更に苛立つていた。この異様な苛立ちは、先ほどの剣舞の邪魔から来るものではない。尋常ではない苛立ち、メアリーはその苛立ちが何から来るのが、心当たりがあった。

「まさか、まさかね……」

そう言いつつも、メアリーは半分確信していた。この苛立ちの原因が、“あの日”の前兆であることを……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8573z/>

---

私の騎士（かれ）は女の子！？

2011年12月31日21時47分発行